

聖書:使徒の働き20章1~12節

説教:パンを裂くために集まる

はじめに

パウロはかつてキリスト者を迫害する者でしたが、ある日、よみがえられたイエスに出会い、劇的な回心をしてキリスト者になったばかりか、今度はイエス・キリストを海外に伝える伝道者に召し出されていきます。その召しを受けて彼は三度にわたり地中海沿岸の町々を巡り、福音を語っていきます。それを聞いた人たちが次々と救われ教会が建てられていきました。できたばかりですから、なにもかもが手探りでやるしかない。これは本当に大変だったと思います。パウロもそのことを心配していました。それで、伝道旅行を終えてエルサレムに戻る帰り道に、教会にもう一度立ち寄ります。

今日の箇所は、パウロがトロアスという町に立ち寄ったときに思いがけない事故が起きたことが書かれています。これは私たちにとってどんな意味があることなのか。そのことを見てまいります。

1 屋上の間で起きた事故

1) ユテコ

パウロはトロアスに七日間滞在し、いよいよ明日出発という日、屋上の間を借りて集会を開きます。パウロは早いうちにエルサレムに行かなければならないという願いがありましたので、長く滞在できません。時間が限られていました。一方離れたことは山ほどあるので、結局明け方近くまで集会が続きます。

そのとき事故が起きました。集会に出席していたユテコが居眠りをして、三階の窓から落ちてしまいます。驚いて皆が駆けつけてみるとすでに息絶えていました。取り返しのできないことが起きてしまいました。

ところが10節にこう書かれています。「しかし、パウロは降りて行って、彼の上に身をかがめ、抱きかかえて、『心配することはない。まだ命があります』と言った。」

パウロが旅行中のことですが、彼の身につけていた手ぬぐいや前掛けに手を触れると病人であれば病気が去り、悪霊も出て行くということがあります。その理由については19章11節にはっきりと書かれています。「神はパウロの手によって、驚くべきわざを行われた。」ですから、パウロが身をかがめたらユテコがよみがえったのも、パウロの特殊な能力というのではなく、神が驚くべきわ

ざを行ったからと理解すべきでしょう。それでこの事故のことは一件落着なのか。

2) 旧約の二つの記事

どうも気になることがある。これ似た話、聖書の他の箇所にあるのではないか。そう思って調べてみると旧約聖書に二箇所ありました。

一つは第一列王記17章です。預言者エリヤが、ある一人のやもめの家の屋上の方にしばらく滞在していたときのことでした。この家の一人息子が病気で死んでしまいます。エリヤはどうしたか。エリヤはその子どもを自分の寝床に寝せてこう祈りました。20, 21節。「『私の神、主よ。私が世話になっている、このやもめにさえもわざわざを下して、彼女の息子を死なせるのですか。』そして、彼は三度その子の上に身を伏せて、主に叫んで祈った。『私の神、主よ。どうか、この子のいのちをこの子のうちに戻してください。』」

神はその祈りを聞かれて、子どもは息を吹き返しました。

二つ目は第二列王記の4章です。エリヤの弟子であったエリシャが、ある夫婦のところに世話になり、屋上の間を借りて住んでいたことがありました。ところがある日突然、この夫婦の息子が頭が痛いと訴えてあつげなく死んでしまいます。そのときエリシャはこうした。34節。「それから、寝台の上に上がり、その子の上に身を伏せ、自分の口をその子の口の上に、自分の目をその子の目の上に、自分の両手をその子の両手の上に重ねて、その子の上に身をかがめた。すると、その子からだが温かくなってきた。」

今二つの箇所を簡単に見ましたが、不思議なほど共通点があります。男の子が突然亡くなったこと、屋上にあった部屋に寝かせられたこと、子どもの上に身を伏せたこと、などがそうです。

パウロは旧約聖書をすべて暗記している人でしたから、ユテコが屋上の間から落ちたのを見て、この旧約の二つの記事を当然のように思い起こしたはずで、パウロは、かつてエリヤとエリシャがしたとおりにユテコの上に身をかがめました。そうしたら、よみがえった。確かに、旧約の時代であろうが新約の時代であろうが、神は同じ神ですから、同じようなことがここでも起きた、と考えることはできるでしょう。でも、ただそれだけなのか。なにかもっと深い意味があるように感じます。

2 パンを裂く

1) パン裂きとユテコ転落事故

いま、エリヤとエリシャの出来事とユテコの身に起きたことに共通点があるといいました。でも、よく見るとここにしか出てこないものがある。それは何か。7節と11節を読みます。まず7節から。「週の初めの日に、私たちはパンを裂くために集まった。パウロは翌日出発することになっていた。人々と語り合い、夜中まで語り続けた。」次に11節。「そして、また上がって行ってパンを裂いて食べ、明け方まで長く語り合っ、それから出発した。」

ユテコの転落事故は、ちょうどこの二つの「パン裂き」の記事には含まれるようになっていきます。これは何を意味するかといえば、パン裂きのこととユテコが奇蹟的に生き返ることには強い関係があることを教えている。そのように読むことが可能です。では、いったいどんな関係があるのか。

2) 初代教会が重視したパン裂き

パン裂きとは、今私たちが聖餐式と呼んでいるものです。いまさら言うまでもないことですが、これはイエスが私たちに教えてくださったことでした。その箇所をお読みします。マタイの福音書26章26節。「また、一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、神をほめたたえてこれを裂き、弟子たちに与えて言われた。『取って食べなさい。これはわたしのからだです。』」

エルサレムに世界最初のキリストの教会が建てられたときも、信じて集まった人たちが真っ先にしたことはこのことでした。使徒の働き2章42節です。「彼らはずっと、使徒たちの教えを守り、交わりを持ち、パンを裂き、祈りをしていた。」

教会は何をやる場所ですかとよく聞かれます。神を礼拝すること、教えを守ること、交わりをし、パンを裂き、祈りをします。それが教会のすべてです。パウロも限られた時間の中にあっても、トロアスの教会の人たちとパン裂きをしなければならいと考えるほど大切にしました。まずそのことをおさえておきます。

そのことを確認してから次に、パン裂きとユテコの転落事故とどんな関係があるのかを見ます。

3 いのち

1) 「心配する」＝「騒ぐ」

考える糸口は10節です。「心配することはない。まだいのちがあります。」周りにいる人々に向かっ

て、大丈夫、安心して下さい、と語ったことばにも聞こえますが、なにか深い意味があるのではないかと。私は気になってしょうがない。パウロのは二つのことを言っています。一つ目は「心配することはない。」二つ目は「まだいのちがあります。」

まず、「心配することはない」から見ましょう。日本語では気がつかないのですが、1節に「騒ぎが収まると」という表現があります。その「騒ぎ」ということばと10節の「心配する」ということばが、一方は名詞、もう一つは動詞という違いがありますが、同じことばが使われている。偶然かも知れません。でも私にはそうは思えない。

前回見たことですが、エペソの町で銀細工職人が集会を開いてパウロを糾弾しようとして町中が大混乱に陥った、それが騒ぎです。町の書記官が群衆を説得して集まりを解散させた。それで1節の「騒ぎが収まると」につながります。なぜエペソの町の人たちはこんな騒ぎを起こしたのかと言えば、パウロが「人の手で造った物は神ではない」と語ったことばに激しく反応したからでした。アルテミス神のおかげで自分たちは商売ができて儲けさせてもらっている。それなのに、パウロがこんなことを言うなどんでもない。商売があつたり、飯の食い上げだ。言い換えれば、このままでは「いのちがなくなる」ということです。それで人々は心を騒がせてしまいました。

2) 「まだいのちがあります」

いっぽう10節の「心配することはない」は、それとはまったく正反対です。ユテコにはいまいのちがある。だから心配することはない。心を騒がせることではない。

私たちもときどき心を騒がせるような出来事に遭遇することがあります。特に、自分や家族、あるいは親しい人の健康やいのちに関係する話であればどうでしょうか。だれも、じっとしてはられないでしょう。不安に襲われます。それがひどくなると、何を食べてもおいしいとは感じなくなる。食欲がない。食べ物を口に運んでも、まるで砂を嚙んでいるように思うときもあります。みんながあははと笑っているときも、とても笑えません。世界が急に真っ暗になっていく感じさえします。心を騒がせます。

でもパウロは言いました。「心を騒がせることではない。」なぜならいのちがあるから。いったいそれがいのちを与えたのか。先ほども言いました。パウロではない。神が与えたくくださった。

3) いのちのパン

そのいのちは、どのようにして与えたださったのか。パンを裂くことと深いつながりがあります。主は言われました。ヨハネ6章48節「わたしはいのちのパンです。」そのいのちのパンについて主は言われました。「取って食べなさい。これはわたしのからだです。」

パウロは、ともにパンを裂くことにこだわりました。なぜでしょうか。それは、主が私たちに何を与えたださるのかに関わってきます。神は、私たちが幸せになるようにといろいろなものを与えてくださいます。それは確かです。そのために私たちはいろいろと神に祈り求めるでしょう。でも幸せとは何でしょう。この世の名誉をいただくときですか。高い地位に着くことか。たくさんの財産を持つことか。名声なのか。自分の夢が実現されることなのか。ある人にとっては幸せだと思うことかも知れません。でもこれらは皆いつか朽ち果ててなくなってしまうものです。神が与えてくださるものは本物です。本物であるなら朽ち果てることは絶対ない。それは何か。永遠のいのちである。

ユテコがよみがえるという奇蹟と、パンを裂くということと無関係ではありません。主は、パンを裂くために集まる人たちに朽ちないいのちを与える。そのことを人々は間近に見て、大きな慰めをいただくことができた。

このあと、私たちは聖餐式を持ちます。主がこのようなことをしなさいと言われるとき、決して儀式ではない。主が朽ちないいのちをご自身のからだをもって与えてくださっていることを確かめ、味わうために聖餐の場に招かれている。そのことをもう一度覚えたいと思います。